

響

流



本山・御影堂（2009年11月25日住職撮影）

私は ^{ぶつ}しばしば
仏を忘れるが
仏は私を忘れない

西光寺通信『響流』 第63号
発行日 2010（平成22）年3月15日
発行者 真宗大谷派（本山/京都・東本願寺）
西光寺 住職 藤石哲朗（法名釋徹舟）
〒110-0015 東京都台東区東上野 6-15-6
Tel. 03-3841-3229
Fax 03-5828-4495
E-Mail saikoji@xvh.biglobe.ne.jp

お彼岸がはじまります

三月二十八日〜二十四日は春のお彼岸です。

ずいぶん前にもこの通信にも書いたことですが「氷が溶けると何になる？」という問いかけに雪国のある子が、よろこびにあふれた笑顔で「春になる！」とこたえたそうです。でも、それは理科の時間だったので、その答えは認められませんでした。

理知の世界ではそうなのでしようが、たぶんその子のご両親や、もしかしたらおじいちゃんやおばあちゃんが、そうやって喜んで恵みを受け取るという、生活の中からの言葉を実感として聞き取ってきたのでしよう。雪解けの大地から芽吹いてくる草花をいっしょに慈しみながら。

私にはそういう感覚はありません。ないというよりも見えなくなっているといった方が正しいかもしれません。理知的な能力もなく、みずみずしい感覚もなくして生きてしまっている、お恥ずかしいことです。

彼岸はインドの古語サンスクリット語の Paramita (パラミター) を「波羅蜜多」(はらみった)と音写し、意味から「到彼岸」(とうひがん)と漢訳された仏教用語です。



この世である此岸(しがん)に対してさとりの世界である涅槃(ねはんじゃくじょう)の世界をいいます。

みなさんは「お彼岸」をどのように過ごされていますか？

浄土真宗に限らず多くのお寺やお墓に大勢の方々がお参りをされます。こういった仏事は平安時代から始められ、私たちも祖父母や両親からそのすがたを伝えられてきました。

此岸に生きる私たちが、迷いの生死(しょうじ)の世界から、阿弥陀如来の浄土の世界の岸に到ることを願う仏事とされています。

このお彼岸の思想は、悩みや苦しみのない浄土に生まれたいと願わずにはおれない、私たち人間のここから生まれてきたと云えるのではないのでしょうか。

現代ではお彼岸はお墓参りをし、先祖供養をすることだとされてしまっていますが、親鸞聖人の教えを聞かせていただくご縁をいただいている私たちにとって、お彼岸をお迎えする大切さを、あらためて考えて生きたいものです。経済的にたいへんな時代に生きている今、慌ただしい生活を強いられる中で、亡き人とおして自らを省みて、仏法に耳を傾けることが願われているのではないのでしょうか。

お葬式やご法事で、こういった事を耳に

します。それは、「故人もさぞ喜んでいらっしゃる」と思います。」その言葉の前には、お酒が好きだったから、とか、賑やかなことが好きだったからとかが付く場合もあつて、お通夜・お葬儀は亡き人からのメッセージを聞き取る大切な時間であり、私たちの「思い」がいかに儚いものであるのかと受けとめさせていく千載一遇の場であるのですが、賑やかに送ってあげれば喜ぶはずだと、そのことを肯定するときに使う方も多いようです。お葬儀に参列するのも、お墓に参るのも、亡くなられた方々に対する私たち遺されたものの愛情があるからこそではあります。その思いも単に私たちの一方的なもので終わるなら、残念なことにならないかと思えます。

亡き人を案ずる私が、亡き人から案じられている

私たちは自分の思いを中心にした眼（まなこ）しかもっていないのです。それが此岸、こちらの岸。彼岸とは、人間の思いに濁されない世界、浄土ということなのです。

悲しみや苦しみを縁として、一方的にしか亡き人を、そして人生を見てこなかった私たちの姿が、彼岸から照らし出され、人生を見る眼が転じられるのでしょうか。彼岸は単にお墓参りの行事ではなく、教えのことばなのです。

私は亡き人から何を聞き取れるのだろうか。彼岸の声として。

春季彼岸会 合同法要

2010（平成22）年3月21日（春分の日）

11:00 総礼 伽陀「先請弥陀」 仏説阿弥陀経
正信偈 同朋奉讃 御文

11:30 法話 西光寺住職

勤行本（赤本）をお持ちの方はご持参下さい

お墓にお参りされる前に、必ず本堂に上がってお参りして下さい。

法要に間に合わなくても、お彼岸期間中いつでも本堂にお参り下さい。

お宅のお仏壇どうなっていますか？

お彼岸やお盆のときにご自宅へお参りをさせていただけいておりますが、それぞれのご事情もありお仏壇のありようも様々です。これは東京では関東大震災のあと、仮のお住まいであったも、とりあえず、お内仏（正式にはお内仏と申します。お仏壇は製品名です）をということで、本格的な復興までということでした。当時、名古屋から簡易型のお仏壇を納入したお家が多かったそうです。震災前までは真宗門徒の多くのお家には、きちんとしたお内仏が安置をされていたということ、古老のご住職から伺ったことがあります。

しかし、その後昭和になり不幸な戦争が始まりました。そして広島、長崎はもとより、多くの街で空爆があり、ご承知のとおり東京も3月の大空襲で焼け野原になったことです。そうすると、いずれ立派なお仏壇をということも後回しとなり、震災から20年以上経てば一世代代わるわけですから、「とりあえず」といつていたものが当たり前になるといって、真宗門徒のお家でも正しいお飾りのお仏壇が少なくなったという経緯が容易に想像できます。

西光寺も戦後24年に先々代住職が亡くなり、その後後継者がなかなか決まらず、昭和40年に先代住職が本山からの命でお預かりをさせていただくこととなったことです。そういう事

情がありますので、ご門徒の皆さまにお内仏のお飾りや、ご本尊についてお伝えする事が、ないがしろになっていたことをあらためてお詫び申し上げる次第です。

父の喉の具合が悪く、喉頭癌の疑いもあったため、本山での勤めを辞めて京都から戻ってから少しづつお話しをさせていたのですが、父である住職はまわりへの遠慮があつたのか、あまりそのことについては申しませんでした。もつとも外回りには私が行っていましたから、現状があまり認識されなかつたのかもしれない。

今、お寺に来られて本堂脇のお座敷でご接待をさせていただくことが多いのでお気づきの方もいらっしゃるでしょうが、そこに安置されているのが藤石家のお内仏です。母の一周忌を縁に修復をいたしました。

今は結婚されると別にお住まいをされると言うことが一般的で、「お仏壇を」とお聞きすると「まだ、誰も亡くなっていますから」というお答えが返ってきます。また、親御さんが老齢になられたので引き継いでほしいとお願いをされたら「邪魔だからいらない」と言われ、どうしたらいいでしょうというお話もしもお聞きすることがありました。

そこで、今回はお内仏の意味、ご本尊ということをお伝えしたいと思えます。



九字名号
(なむふかしぎこうによらい)

阿弥陀如来 (南無阿弥陀仏)
(あみだによらい)

十字名号
(きみょうじんじつぼう
むげこうによらい)

「本尊とは

本心に尊いことを私たちに示して下さるおはたらきのことです。「いろいろかたちもない」といわれる真実のはたらき(本願)をかたちとして表されたものです。中央にあるかたちで表した絵像は阿弥陀さまです。向かって右脇は十字名号、左に九字名号をおかけします。この名号は「南無阿弥陀仏」の六字の名号を漢字の意味で表した言葉です。(このお脇掛けの代わりに親鸞聖人と蓮如上人のご絵像をおかけすることもあります。藤石家はご絵像です)

なぜ、本願念仏の教えをかたちで表すのでしょうか。たとえば、相手を思う気持ちには色も形もありません。しかし、それを相手に伝えるときには、自ずと形に(態度)に表れたり、お花やお菓子(の形を添えて伝える)とすることがありますね。いたわりやねぎらいの言葉を掛け、または愛しています(キヨシローさんみたいですが)という言葉で伝えたりします。本当の気持ちや愛にふれることができれば、それは言葉を超えているといえるでしょうが、やはり相手に伝えるためには、それなりの表現をしなければ伝わりませんよね。

本願念仏の教えも同じです。教えは私たちの思慮分別を超えた深くて広いものです。その教えを伝えるために、教えがわざわざ形となって表れたり、言葉となって語りかけて下さるので

す。人間は目で見たものを認識して初めてそのことを理解するという意識構造がありますから、姿も形も匂いもない真実の世界といわれる阿弥陀の浄土を認識することができません。そこであえて形として表しているのがお内仏なのです。何でも好いからと飾り立てているわけではないのです。

形となつた仏さま、言葉となつた仏さまなのです。つまり、私たちに生きる拠り所として本当に尊いことを教えようと「目覚めよ」と、私の上にはたらいてくださるのです。

本尊が本当に尊い「もの」であれば、何年に一回のご開帳といつて、たまにしか公開しないところがあり、何となく価値があるように感じるかもしれません、仏像そのものが尊いのではないのです。真宗のご本尊は「いつでも、だれでも、どこでも、どんなときでも」です。ですから浄土真宗のご本尊はいつでも対面できるということが大事なのです。限られたとき、限られた場所では在家生活をしているものは対面することも適わないでしょう。

さらに、一般的に仏像は座像です。鎌倉の大仏様も東大寺の大仏様も（どちらも阿弥陀さまです）そうですが、真宗の阿弥陀さまは立ち上がったお姿です。木像では一歩前に踏み出して私たちに向かっているお姿で表現されています。これは苦悩する私たちを救わずにはおれないという、阿弥陀さまの大慈悲の現れなのです。苦悩の生活のなかにあつて、いつでも、どこで

も、どんなときでも、自分の在り方を照らし続ける教えに出遇う事ができるのです。

蓮坐に立ち上がる阿弥陀さま

さらにその足もとをみれば、蓮坐に立つておられます（お名号もそうですね）。仏教は蓮をととても大事にしています。それは、大切な意味があるからです。

蓮の花は清らかな高原には咲きません。泥の中に根を張つて、泥の中から、泥に染まらず美しい姿を現します。この泥々としたものは私たちの生活を指しているのです。生きるということは大変な事の繰り返しでしょう。こんな世界は嫌だといって泥から飛び出して別のところに行こうというのは、逃避であり、神秘主義に陥ります。かといつて泥の中で沈んでしまうわけにも、飛び出すわけにもいかない。しかし、もうひとつの道があるよと教えられるのです。泥にまみれた生活であつてもきれいな華を咲かせる道があるのでと。

そして大事なことは、その蓮華が生じている底には泥の中に根があるということです。もつと言えば、泥でなければ蓮華は咲かないのです。泥のような出来事を結果として絶望するのはなく、そのことを縁として自分を深め、歩み出すということが泥に染まらない華が咲くということでしょう。

愛しい人との死別は絶望です。しかし、大切な人であればあるだけ、その別れを通して、死すべきいのちを本当に生きる方向性を与えていただくのではないのでしょうか。だからこそ、亡き人を真実に眼を開かせてくださった、ご本尊に導いてくださった諸仏と仰ぎ、その法名をお内仏に安置するのでしょうか。亡き人は、私たちを生かしめる諸仏として、阿弥陀仏に南無（帰命）せよと、呼びかけ続けてくださる仏さまとして、もう二度と別れる事のない存在として生きてくださるのではないですか。そのことを通して状況に振り回されながら生きている私たちですが、どんな状況でも「誰にも代わることでできないこれが私だ」といただいて一人で歩んでいくことのできる力を与えられるのです。一人で歩めるからこそ、人とも「共に」歩むことができるのでしょうか。自分以外の何かに依存する、従属する生き方は自分を虚しくすると言うことです。

ひと頃、お葬式のあと、DMメール等で何割引と銘打って、もともと手の込んだ仕様でもなく、良い材質でないものを特別に安くお分けしますという仏壇の広告で求められ、「本尊はオマケしておきます」といったものを見かけましたが、申しましたとおり大事なおはたらきをあらわすものですから、ぜひ本山からお受けなさっていただきますようお願いいたします。

お内仏をお迎えするのはどなたかがお亡くなりになってから

ではありません。以前は所帯をもつたら、親御さんがご本尊をお迎えされ、それを渡していただきました。「お内仏のない家は犬小屋と一緒だ」といって、家の中心として教えをいただくお内仏を安置することの大切さをお伝えくださった歴史がありました。

わからないことは気軽に住職までお尋ね下さい。この機会にご本尊をお迎えしたいという方、いままで絵像だけであったという方は住職にご相談ください。

言葉にまですなつた仏さまが南無阿弥陀仏です。いつでも・どこでもお念仏申すことができます。如来様の呼び声であるお念仏の意味をいただいていくには、やはり教えを聞くということ（聞法）が大事です。西光寺の法座にお出かけください。あなた自身、南無阿弥陀仏の教えから願われている存在なのですから。

必ずしも大きなものである必要はありません。下のような、廉価なお厨子タイプのものも本山では用意されています。

